九州大学学術情報リポジトリ Kyushu University Institutional Repository

京城だより④『定本久生十蘭全集』未収録資料紹介 「"酒の害"について」、「激流」を中心に

嚴, 基權 九州大学大学院比較社会文化学府: 博士後期課程

https://doi.org/10.15017/27415

出版情報:九大日文. 20, pp.23-33, 2012-10-01. 九州大学日本語文学会

バージョン: 権利関係:

京城だより④

資料紹介『定本久生十蘭全集』未収録

――「〞酒の害〟について」、「激流」を中心に――

最基權

はじめに

がそれである。 城日報」昭和一五年一月一八、一九、二一日/全三回)という短編小説二六回)という長編小説と「探偵小説 "酒の害 "について」(「京流」(「京城日報」昭和一四年一〇月二〇日~昭和一五年二月二三日/全一「京城日報」には久生十蘭作の小説が二編掲載されている。「激

を思いだし、罪を認めるというあらすじとなっている。

となる。ただし、その作品の本文の構成は、「京城日報」掲載が、正しくは、外地で発行されていた「京城日報」がその初出書き下ろしで〈小説選集〉の一冊として刊行」と記されている日報」の「激流」と一致している。『全集』解題には、「女性の力」という長編小説が収録されていて、その内容は「京城性の力」という長編小説が収録されていて、その内容は「京城性の力」という長編小説が収録されていて、その内容は「京城性の力」という長編小説が収録されていた「京城日報」というとは、この二つの作品と同じタの月九日~刊行中の『定本久生十蘭全集』(国書刊行会、平成一九年一現在刊行中の『定本久生十蘭全集』(国書刊行会、平成一九年一

夜帰りに酔っぱらってタクシー運転手と喧嘩し、殺害したことを帰りに酔っぱらってタクシー運転手と喧嘩し、殺害したことでいる。通りかかっていた木谷道夫は、殺人者は必ず現場に戻ている。通りかかっていた木谷道夫は、殺人者は必ず現場に戻でいる。通りかかっていた木谷道夫は、殺人者は必ず現場に戻すれたを疑い始める。しかし、捜査の協力のため、警察署に行ってくるというある博士の「殺人論」を思い出しながら、そのてくるというある博士の「殺人論」を思い出しながら、そので、警察署で差し出されたお酒を飲んでから、実は自分が昨た木谷は逆に犯人として疑われる。木谷は断然と嫌疑を否定すた木谷は逆に犯人として疑われる。木谷は断然と嫌疑を否定するが、警察署で差し出されたお酒を飲んでから、実は自分が昨まっている。本谷は逆に犯人として疑われる。本谷は断然と嫌疑を否定するが、警察署で差しれたととなる。本谷は前のではいる。本谷は所述を表したことを帰りに酔っぱらってタクシー運転手と喧嘩し、殺害したことを帰りに酔っぱらってタクシー運転手と喧嘩し、殺害したことを帰りている。

偵小説 れている。連載日から確認できるように、 て」、「探偵小説 年二月九日から一〇、一一、一三、一四日まで、それぞれ「探 に、五回に渡って連載されていたことが確認できる。 篇4)」(「金沢大学教育学部紀要 いた。森英一作成の「「北国新聞」文芸関係記事年表稿 聞である「京城日報」に掲載の後、内地の新聞にも掲載されて ほど早い時期に、 「探偵小説 『全集』未収録の作品だが、実はこの短編小説は、 以下「年表稿」)には、石川県で発行されていた「北国新聞」 酒害をめぐつて」、「探偵小説 酒の害悪を繞つて」、「探偵小説 外地の新聞に連載されていたことがわかる。 酒の害悪を繞つて」というタイトルで連載さ 人文科学社会科学編37」昭和六三年二 酒の害悪をめぐつて」、 内地の新聞より半月 酒の害悪を繞つ 外地の新 昭和一五

ンス留学体験から題材を得た小説を数多く執筆している。また、昭和四年から八年までフランスに留学した久生十蘭は、フラ

に掲載されていた二つの作品は、内容的には朝鮮との直接的なした小説などを残している。今回本稿で紹介する「京城日報」戦中には海軍報道班員として南方に赴き、日記や南方を舞台に

年の間、内地の雑誌だけではなく、外地の新聞にも作品を寄せ関係は認められないにしても、久生十蘭が昭和一四年から一五

それではまず、「激流」の広告文を紹介する。資料及び作品重な資料になると考える。ていたという、彼の創作活動の新たな一側面を見せてくれる貴

仮名遣いで表記した。なお、活字がつぶれ、判読困難な文字は字は可能な限り、原文そのままの旧字体で、仮名遣いも歴史的の翻刻にあたっては、本文表記は原則として原文に従った。漢

「激流」の広告文と作品の内容について

次の本紙朝刊新小説

"激流 《 作者》 久生十蘭 挿畫 伊勢良夫®

蘭氏作の「激流」と決定しました、伊勢良夫氏の挿畫と共に必の小説に就て■■■■中のところ、我國文壇の新進作家久生十の小説に就て●■■■中のところ、我國文壇の新進作家久生十一個人の一般である。といるりましたので本社では次書者諸君から多大の好評を頂いた尾崎士郎作、髙木清挿畫の讀者諸君から多大の好評を頂いた尾崎士郎作、髙木清挿畫の

ずや讀者各位の御滿足を得るものと確信致します。

作者の言葉

を剩すところなくつたへようと思ふ。 を剩すところなくつたへようと思ふ。 を利すところなくつたへようとする若き女性の悲壯な■■である。 料の愛を 貫いて生きようとする若き女性の悲壯な■■である。 料の愛を 貫いて生きようとする若き女性の悲壯な■■である。 を利すところなくつたへようと思ふ。

思ふ、倖ひに、讀者諸賢の御支援を得ば、これに過ぎる喜び思はれるとき、この眞摯な題材と眞劒に四つに組んで見ようと我々の精神の低落を支へ生活することの希望を與へてくれると我々の精神の低落を支へ生活することの希望を與へてくれると我々の精神の低落を支へ生活することの希望を與べてくれるとなる。

畫家の言葉

はない。

ばき…た、こと、? この度光榮ある本紙に再登場の機會を惠まれましたことは

からんことを私かに念じつゝ筆を一洗して大いに張り切つてる願はくば新しき感覺に充てる作品の近代的性格を傷つくるな感激に堪へません。

ます。

せ中の久生十蘭氏=右と伊勢良夫氏=左】 讀者諸君の支持と聲援を期待して止みません。【寫眞=打合

〔「京城日報」 昭和一四年一〇月一三日朝刊七面〕

れる。数ヵ所に本文の異同は見られるが、話の筋は同じである。昭和一五年に博文館から『女性の力』というタイトルで出版さ五年二月二三日まで総一二六回に渡って連載された「激流」は、「京城日報」に、昭和一四年一〇月二〇日から翌年の昭和一

うとする馨子など、様々な男女の錯綜した関係の有様が描かれ復讐を誓う幸子と自分の好きな男(冬彦)を真波と結婚させよ幸子の兄清次郎が、失恋のために自殺するという事件が起きる。東京に向かう。一方、東京では同じミッションスクール出身の七年間の生活を後にし、唯一の伯母である馨子の招待に応じて、主人公の真波は、長崎の島原にあるミッションスクールでの一主人公の真波は、長崎の島原にあるミッションスクールでの一

ている長編小説である。

の通りである。

「全集』第四巻に収録された作品のその章立ては、以下とする『全集』第四巻に収録された作品のその章立ては、以下の章立てと、昭和一五年に単行本化された『女性の力』を底本出と単行本では章立ての違いも見られる。「京城日報」連載時出と単行本では章立ての違いも見られる。「京城日報」連載時本ではその後日談が書き加えられた形となっているが、単行から飛び降りる場面(第二二六回)で締め括られているが、単行から飛び降りる場面(第二二六回)で締め括られているが、単行がら飛び降りる場面(第二六四)である。

人」(二~五)、「愛着」(二~六)、「女性の力」(二~二〇)~九)、「即興曲」(二~二二)、「椿貞三」(二~二二)、「代理の「疑惑」(二~二二)、「温室の中」(二~八)、「四人の客」(二~三)、「落葉の記」(二~二)、「闘志」(二~八)、「晩餐」(二~二三)、「落葉の記」(二~二三)、「冬薔薇と鷽」(二~二三)、

れている。

■『全集』――「出発」(1~五)、「信愛」(1~1、)
 直言」(1~五)、「発の街」(1~五)、「代理人の人」(1~1、)
 「再会」(1~1、「疑惑」(1~1、「温室の中」(1~1、「四行」(1~1、「疑惑」(1~1、「温室の中」(1~1、「四行」(1~1、「疑惑」(1~1、「温室の中」(1~1、「四行」(1~1、「疑惑」(1~1、「温室の中」(1~1、「四行」(1~1、)(1~1、)(1)1、)(1~1、)(1~1、)(1~1、)(1~1、)(1~1、)(1~1、)(1~1、)(1~1、)(1~1、)(1~1、)(

「椿貞三」という男の名前が『全集』では「菅直記」と変更さい。初出の「女性の力」(九)と単行本の「信愛」(二)まで、ない。初出の「女性の力」(九)と単行本の「信愛」(二)まで、ない。初出の「女性の力」(九)と単行本の「信愛」(二)まで、ない。初出の「女性の力」(九)と単行本の「信愛」(二)まで、ない。初出の「女性の力」(九)と単行本の「信愛」(二)まで、ない。初出の際にはなかった「信愛」(二)と「信愛」(二)まで、ない。初出の際にはなかった「信愛」(二)と「信愛」(二)まで、ない。初出の際にはなかった「信愛」(二)と「信愛」(二)まで、はいう六回分が単行本に加筆されたわけである。その他にも初という六回分が単行本に加筆されたわけである。その他にも初という六回分が単行本に加筆されたわけである。その他にも初という六回分が単行本に加筆されたわけである。その他にも初出が見られている。

三ケ月、日本文壇に一大波紋を投ずべき新しき。百万人の文学聞小説に初めて筆をとる久生氏は他の一切の執筆を絶つて構想リ」の連載前の予告記事「次の連載小説」(三月三二日) には、「新戦後の昭和二三年に「読売新聞」に発表された「ココニ泉ア

うに、 の記事が引かれている。 、を揚げて登場する」という紹介文があり、『全集』解題もそ 新聞連載小説の執筆活動を行ってきたのである 久生十蘭は戦前から、しかも外地新聞の「京城日報」上 しかし、本稿でこれまで見てきたよ きや、豆腐屋や、牛乳配達や、よなげや、前に行く棟梁や、そ

『定本久生十蘭全集』 未収録作品

続いて、「探偵小説

″ 酒の害 〟について 」全文を掲載する。

てゐた。

〃 酒の害 ~について(上)

久生十蘭

本づつ霜でしやつきり立つてゐる。 霜のひどい朝で、 地面にまばらに生えてゐる短い草の葉が

日がしかけてゐた。 まだ朝が早く、戸山ヶ原の射垜後の混凝土の髙い塀の上に朝

うにして解伏せに倒れてゐた。ぼんのくぼに、霜が光つてゐた。男は赫土の上に類をおしつけ、左腕を腰の方へ折り曲げるや しく顳顬のところの皮膚が捻じけ、そこから流れ出した血が一何か角のある石のやうなものでこツびどくぶツ叩かれたのら

寸ほどの幅で赤いリボンのやうに頬の方へ垂れさがつてゐる。

つ込んだところなので、たいした人集りはしてゐない。御用聞いま言つたやうに、まだ朝が早く、それに、道路から少しひ ゐず、ノオ・ネクタイに板裏といふ風態で、ひと眼でタキシー の運轉手だといふことがわかる。 の手の小指に下司張つた銀指環を嵌めてゐる。帽子はかぶつて 濃い鼠と黑の、目のつんだ格子織の服を着、折りまげた方

> ろに立つて、遠くからおづおづと眺めてゐる。 んな風な早起きの連中が七人ばかり、すこし小髙くなつたとこ 木谷道夫は、さういふてあひの後に懷手をしながら突つ立つ

倒れてゐるこの男が、すつかり絶命してゐるなぞといふは、な紫。死體なんてえものを見たのはこれが最初だつたので、こゝに、一、是常 にか納得ゆきかねるやうな氣持だつた。

が重い翌朝などはきまりのやうに、この原ツぱをひと廻り散歩木谷の家は、技術本部の傍にあるので、飲みすぎて胃の腑らうかのと極く月並のことを言ひ合つてゐる。 だらうかの、ぶつくらけえつて切石に 頭 をメリ込ませたのだ んとかいひながら、むつくり起き上つてきさうでしやうがない。 見てゐる方の連中も、一向のんきなもので、喧嘩でもしたの かうしてゐるうちに、頭へ手をやりながら、あゝ、

たので、フラフラと起き上り、 ながらモ末モダしてゐたが、どうにもをさまりがつかなくなつ で、いやにこツ早く眼をさまし宿酸のだぶつく胃袋をさすり することにしてゐる。 足をかぢかませてこゝまでやつ

ける氣もしなかつたが、そのうちにだん~~慣れて來て、眼の隅一瞥した當座は、なんだか穢らはしいやうでまともに眼を向一 て來ると、この始ダだつた。 からヂロゟ〜眺めながら棟梁の空言に平氣で合槌が打てるやう

になった。

いふ講演をきいたことがあつた。それを、フト思ひ出した。木谷は、いつか法醫學教室で何やらいふ博士の「殺人論」 殺人者の良心といふ條で、伊太利のフエリといふ學者の説だい。 いまである。 では、だいたいこんなものだつた。 いつか法醫學教室で何やらいふ博士の「殺人論」

ことである」――つまり、殺人者は兇行の場所や被害者の死體といつて、「殺人者の特徴の一つは、犯行の場所へ戻つて來るといつて、「殺人者の特徴の一つは、犯行の場所へ戻って來る に、うち克つことのできぬ力でひきよせられるものだといふの

その例として、ドフトエフスキーの「罪と罰」の中で、

刑は事

た。

たので、興味深く思つてそれを記憶してゐた。
がラスコルニコフスキーにそれとなくいひかける言葉を引證し

て、しまひにその中に飛び込んで燒け死ぬやうに、今度の犯人「……ねえ君、ちやうど夏虫が火の周りを幾度もぐる~~麺」

る。かうな氣がする。なんとなく面白くなつて來た。 さういふ思ひで眺めると、この七人の中にたしかに加害者が 中へ飛び込んで來るのさ」 も、この町を逃げ出せるわけはなく、そのうちにこちらの手の

ひよつとすると、この獅子嚙んだ、ひしやけたやうな顔をし 順々に眺めわたす。

かずに喋言くつてばかりゐるのが妙だ。そのやうすに、如何にく哥兄ぶつた棟梁も怪しい。さつきから何んだかんだといるお く哥兄ぶつた棟梁も怪しい。さつきから何んだかんだと口をおむつつりしてゐるのが氣にかかる。いや、のつぺりした、ひど た地見がさうなのかも知れない。さつきから、一言もいはずに

ざめる。

も取つてつけたやうな不自然なところがある。 五年 月 一八日夕刊四 面

[「京城日報」

昭和

لح

更

つかりこんがらがつて、何がなんだかわからなくなつてしまつ きれぬといつた風である。…こんなことをしてゐるうちに、す いことだらけだ。多分昨夜から寢なかつたのだらう。眼が血をの氣で見れば、自轉車に凭れてゐる御用聞の方だつて怪。 つて、唇などは土氣色をしてゐる。まさに、良心の呵責に堪 走しし

めてゐるなんてえのは、實に太い話である、ムラムラとして、眼やりたいやうな氣がする。自分で殺して置いて、そこへ來て緣しかし、折角やりかけたことだから、なんとかして看破して がある)尤も、その氣になればその位なことを洞察するのは わけのないことのやうに思はれる。 にモノを見せてやりたくなつた。(畜生め、 白々しいにもほど

色を現はしもし嫌疑が自分の方に向つて來ると心配のために蒼 めてゐるもので、もし探偵が誤った方向を進むときは喜びの誰でも犯罪を行つた者は捜査の經過を熱烈な緊張をもつて眺望。 一章がある。

アンドレアス・ピエルの「犯罪心理學研究」

の中にかうい

ふ

に檢視が行はれるか見たいといふ誘惑にうち克つことはできま いづれにしろ、こゝに立つて眺めてゐるからには、 な風

い。とすると、檢視が終るまでこゝを離れない奴がそれだとい はさういふ定理に從つてこゝへやつてきたのにちがひない。

だ

確かにそれと見分けがついたら、刑事にでも耳打ちしてやらう ふことになる、木谷は、腰を据ゑてとつくりと最後まで見屆け、 刑事は木谷の顔を眺めながら、いいち…」

て、土工と哥兄と近所の隱居らしい山羊髯の三人が殘つた。 そのうちに、御用聞と地見と二人連れの學生が行つてしまつ

隠居にこんな藝賞ができさうもないのだから、残るところ加

は今になつてもまだ口を休めずに盛んに取つてつけたやうな駄害者はこの二人のうちといふことになつた。ところで哥兄の方

洒落を飛ばしてゐる。

を停め、四人前後になつてドヤドヤと乗込んで來た。 それから十分ほどたつと、檢視の連中が草地の向ふで自動車

土工の方は、それを見ると、氣がなささうにテクテクと原ツ

る!)咽喉の奥の方がムヅムヅして、今にも大きな聲で叫び出いよいよ哥兄だといふことになつた。(こゝに、人気しがゐ ぱから出て行つてしまつた。

てきた。意地にも我慢にもやり切れなくなつて、刑事らしいのが一人、煙草に火をつけながら、 しさうでやり切れない。 自分からその ブラブラやつ

犯人は必ず現場へ戻つて來るといふことですがつまり、あいつ どうもすこし喋言りすぎるやうだ…フエリ博士の説によると、 いのが確に加害者です。うはずつたやうな顔をして、それに、 方へよつて行つた。 「……實はね、私はさつきから見てゐたんだが、あの土工らし

> が、「面白さうな話ぢやないか。 せてくれよ。手間ア取らせないから」 「いゝですとも、捜査に協力するのは市民の義務ですからねえ」 ふむふむ、 一緒に署へ來てくはしく聞か とうなづいてゐた

下

[「京城日報」昭和一五年一月一九日夕刊四面

經緯を縷々と述べ立てた。 司法主任の前でもう一度やつてくれといふから、 仕事がなかつたら朝からでも飲み 最初からの

と聞いてゐたが、木谷の一席が終ると途方もないことをいひだ。。これもまた半眼といつたぐあひに眼を閉ぢながら、ほうほう たいやうな顔をしてゐる。可法主任はひどい酒鼻で、

した。 木谷は吃驚敗亡して、ただ。ですくりはいばっている。何つたが、 殺つたのは實は、 君ぢやないの か ね

たしはあなたたちに協力してる側なんですぜ 「それはわかつてゐるが、君の右の耳の上についてゐる血 「じよ、じよ、冗談ぢやない。そんなのツてありますか。 あ

いつたい、どうしたんだね?」 「へえ、血なんぞついてゐますかまるツきり覺えがありません」 思はず手をやつて、

枝にでも引つかけられて出來た傷かも知れませんな」 「覺えがないといふのはどういふ意味だね

司法主任は、頷いて、

んかついてゐないぢやないか。どうして傷だなんていふんだね. 「成程、そんなこともありさうだ……しかし、君の耳には傷な

「それは飛沫つちりの血だ」

と、いつて置いて、突然、拳でドスンと卓を叩き

「とぼけるな、野郎!そんな甘い世界だと思つてゐやがるのか」

今まで後に突つ立つてゐた刑事が薄笑ひをしながら近づいて

つたのはてめえだらう」 「木谷、警察を遊ばせに來るとはてめえも相當太い野郎だ、殺症、 はいこう かき

く、顔色も變へずに應待するので、さすがの熟、練家達も匙をですれば一向身におぼえのないことだから、格別恐いことはなにすれば一向身におぼえのないことだから、ないのではない。 こんなことで、たつぶり夕方までおどしつけられたが、木谷に

投げ出してしまつた。

間もなく司法主任がこちらへ戻つて來て、なんとも申譯これな ンケンヒルドとかなんとかドイツ語まじりで話をしてゐたが、 ひそひそ聲で、トリンケンフエルゲツセン……とか、トリ

くといったやうなテレ笑ひを浮べながら

「いやア飛んだ見込違ひで、えらいご迷惑をかけましたね。 な

らどうかひとくち飲つてください、警察の酒なんてえのも、浮世「格別何もありませんが、お禮のしるしまでに一獻獻じますかか。 といつて、禿上つた頭をツルリと撫でんともはやお詫びのしようもないやうな次第で……」

がズラズラと並び、まア一つ、とかなんとかいひながら、否應警察の仕事は早い。アツといふ間に、仕出屋まがひの小料理はなれがして、ちよつと乙でせう」

木谷も乙な氣持になつてこれは面白いとばかりになしに盃をさしつける。

「ぢや遠慮なく」

ずだつたので、まだこの位ではと思つてゐるうちに俄にドツ 々大束になつてひツかぶつてゐると、何しろ朝から飮まず食は と、ひどく落着いて、刑事連を向ふへ廻し、差しつおさへつ、追

いざこざがあるなら腕で行かうといふと、小癪にも、やりゃ來た……運轉手の野郎が妙にからんだことをいひやがるから、 しよう、ちゃうど、こゝは戸山原だ。二人でどう跳廻つたつて、 と醉つてきた。 突然、木谷の腦裏に思ひもかけない記憶がマザマザと甦つて やりや

これで狭すぎるといふこたアねえ。何をツ、で、霜柱を踏砕き に石をひツ摑んで…… ながら摑み合つたが、すぐにだらしなく組敷かれ、 口惜まぎれ

わかつた 頭の血が、えらい勢のでスーツと足の方へ下りて行くのが

|木谷は、蚊の鳴くやうな聲で呟いた。||だうだ、木谷君、思ひ出したかね?|| 「どうだ、木谷君、思ひ出したかね?|| 司法主任は、ジロリと木谷の顔を眺めて

刑期が終へたら酒だけはよすんだなア」
いるやつさ。酩酊してゐる間にやつたことは一切おぼえてゐといふやつさ。酩酊してゐる間にやつたことは一切おぼえてゐといふやつさ。酩酊してゐる間にやつたことは一切おぼえてゐといふやつさ。酩酊してゐる間にやつたことは一切おぼえてゐといふやつさ。酩酊してゐる間にやつたことは一切おぼえてゐる。

たのである。

(了) 「「京城日報」昭和一五年一月二一日夕刊四面」と、宥めるやうな口調でいつてブルンと酒鼻を撫であげた。

「〞酒の害〟について」をめぐって

るようになる。例えば、昭和一四年には「新青年」掲載の作品は、昭和一四年ごろになるとさまざまな雑誌に執筆を求められし、その後「新青年」を中心に作品活動を行ってきた久生十蘭多様なジャンルの小説を書いた。昭和八年にフランスから帰国探偵物だけではなく、恋愛小説、ユーモア小説、歴史小説など探偵小説作家としてのイメージが強い久生十蘭ではあるが、探偵小説作家としてのイメージが強い久生十蘭ではあるが、

いる。

号)、「妖翳記」(「オール読物」五月号)、「酒祝ひ」(「大洋」五月号)、以外にも、「海豹島」(「大陸」二月号)、「教訓」(「オール読物」四月

「だいこん」(「改造」六月号)、「墓地展望亭」(「モダン日本」七、八

の解説で久生十蘭の短編小説の特徴について次のように述べての解説で久生十蘭全集Ⅱ』(三二書房、昭和四五年二月三二日)月号)、「月光と硫酸」(「新青年」一月号)、「心理の谷」(「モダン日本」一月号)、「月光と硫酸」(「新青年」一月号)、「心理の谷」(「モダン日本」一上での一月にも、「娘ばかりの村の娘達」(「新青年」一月号)、「白五年の一月にも、「娘ばかりの村の娘達」(「新青年」一月号)、「白五年の一月にも、「娘ばかりの村の娘達」(「新青年」一月号)、「白五年の一月にも、「娘ばかりの村の娘達」(「新青年」一月号)、「白五年の一月にも、「原城日報」に「。酒の書』について」が掲載される昭和一

流とか、遭難とか、飢えとか、人肉嗜食とか、殺人とか、界状況的な異常なシチュエーションの設定、たとえば漂逃れようともせず、圧しつぶされもせず、生きてゆく男適」あとがき)から借りれば、「極端に苛烈な運命から、あると思われる都筑道夫氏の文章(桃源社『真説・鉄仮あると思われる都筑道夫氏の文章(桃源社『真説・鉄仮その一つは、今まで書かれた最もすぐれた久生十蘭論で

らいと言われ、 ろうかと思うが、 悲惨をきわめたテーマの物語が生まれる。(中略) もう一つ しさを一切断ち切つていたかと思われる久生十蘭の作品 のモティーフは、 あるいは近親相姦とか、 純愛のテーマが執拗に現われているということを、 孤独好きと言われ、 愛の神秘のモティーフである。交際ぎ いささか意外の感をおぼえる向きも 姦通とかいった、 人間関係のわずらわ しばし びば残 あ 酷

という書物から引用があり、小説の展開に大きな役割を果たしいて」の中でもアンドレアス・ピエルの「犯罪心理学の研究」があり、作品の展開に重要な役割を果たす。「、酒の害、につがあり、作品の展開に重要な役割を果たす。「、酒の害、につれる。例えば、昭和一五年に「新青年」の一月号に発表されたれる。を大生十蘭の創作には作品中に書物の引用がしばしば見らまた久生十蘭の創作には作品中に書物の引用がしばしば見ら

| では)| 「こうさいでは、こうに、「くされて、人具常なシチュエーションの設定」の作品群に属するだろうか。| 選擇の指摘に従うと「〝酒の害〟について」は「限界状況的な

私は何度でも繰り返して強調しておきたいと思う。(太字は

びたび見られる。特に、久生十蘭というペンネームを初めて用ョンの設定」や物語の展開は、久生十蘭のほかの探偵物でもた「〝酒の害〟について」におけるこのような「シチュエーシー・

に改めた。以下同。)

まった五人がお互いのことを疑ったり、「警察に協力するのは害の現場を目撃する場面から物語が展開される。殺人現場に集冒頭で遺産相続の知らせを受けた五人がある酒場に集まり、殺いた「金狼」(新青年」昭和一年七月号~一一月号)では、作品のです。

見受けられるなど、「〝酒の害〟について」との類似点が多々その現場へやつて来てるものなのです。」(三三四頁)のセリフが

殺した犯人なのですが、さういふ場合、その人物は、かならず、

市民の義務でさ。」(『全集』第一巻、一九一頁)、「すなはち絲満を

「京城日報」における探偵小説

ている。

のだけを挙げてみると、次のとおりである。(なお、漢字は新字体くない。タイトルに「探偵」というキーワードが付いているも「京城日報」には、久生十蘭の作品以外にも、探偵物が少な

□日)
□本田千里「探偵物語 ダイヤ賊」(大正一一年八月一九、二○、二

中尾孤月「探偵小説 金庫の鍵」(大正一二年五月四、五日)(3二五日)一二五日

●濱尾四郎「夏のエピソード(3)犯罪・探偵小説」(昭和七年二六日) - 甲賀三郎「探偵小説 現場不在証明」(昭和七年一月二一、二三、●甲賀三郎「探偵小説 現場不在証明」(昭和七年一月二一、二三、

七月二日

馬場孤蝶 ·雨村 探偵 探偵小説とギヤングの魔手」(昭和七年一〇月二二日 小説 窓から覗く顔」(昭和九年一月三、 ţ

木下宇陀児 探偵小説 曲 馬団綺譚」(昭和一〇年一月三、

木々高 i 太郎 探偵 小説 極 量 (昭和一一年一月三

百

的に掲載したが、そればかりではなく、 うになる。このように「京城日報」は、 されていた。昭和に入ってしばらく見当たらなくなっていた探 以上のように、 再び昭和七年ごろから「京城日報」 「京城日報」には大正末から探偵 探偵小説や評論を積極 「探偵漫談」のような の紙面を飾るよ 小説 が :掲載

昭和五年六月二一日の「京城日報」 、集ひ」という謳い文句の、 の紙面には、「尖端 で行

られている。

催しも主催していた。

声を保持する甲賀三郎 乱歩らと並称せられ、 偵物漫談界の第一人者、 いうイベント広告が確認できる。 場所は京城日報社の来青閣となっている。出演者は さらに、イベント翌日の記事には甲賀三郎について、「探 関種子嬢」、「ピアノ伴奏 甲賀三郎氏」、「テノール歌手 黒田進氏」、「ソプラノ 漫談家としては大辻史郎の右に出づる名 氏の創作による探偵物を獲得のうまさで 甲賀三郎氏(中略)作家としては江 日時は六月二六日の午後八時 君島愛子嬢」という顔ぶれで 「探偵漫談と音楽の夕」と 「探偵

> この方面の小説を記載してゐる月刊 偵漫談会」は府内、 雑誌を圧し、すばらしい成績を収めてゐる、しかし今日まで「探 否半島に催されたことの先例なく今回が 「新青年」の 売行は他の諸

の催しについては、「府内においても探偵趣味は漸次高

まり、 と一時間」とあり、 破れるばかりの拍手に迎へられて登壇、 二七日の紙面に「朝鮮で最初の探偵漫談 の内容が知らされていなかった「探偵漫談」の内容につい に盛大に宣伝された などが広告文と共に「京城日報」に掲載されている。このよう 理からぬことである」とその意義を宣伝している。 矢であるだけにセンセーショナルな期待を持たれて居るのは 日の二六日までほぼ連日イベントのプログラムや歌われる歌 探偵物のトリツクを巧なゼスチユアで語り堂を魅するこ 「探偵漫談と音楽の夕」、特に当日までそ 探偵漫談」の内容と観客からの反応が綴 まづ支那の馬賊話に初 -甲賀三郎氏は場も その後も当 いては、 無

て」が、 べてみても、 述した内地の地方新聞である このような「京城日報」における探偵小説の掲載本数は、 昭和一五年には久生十蘭の 「京城日報」に掲載されるわけである 見劣りするものではないことが確認できる。 「北国新聞」 「探偵小説 0 ,, 「年表稿」と見比

【注記】

伊勢良夫 麗人荘」(「京城日報」昭和一三年七月一六日~昭和 (明治三八年~昭和六二 は 「激流」 他に 年一月 田敏彦作

大衆に語るのである」と紹介している。

また、

引き続いて今回

の挿絵を担当している。『図説 絵本・挿絵大事典』(大空社、平成二〇	城日報」昭和一九年九月一日~昭和一九年一二月三一日/全一一四?回)	〜昭和一六年九月一五日/全二一○回)、山中峯太郎作「東天新生」(「京
火	3	2
火箸千本」は内容から判断すると、全三回分の小説である。しかし、復	母の病気を治すため、火箸を千本盗んだ息子の話を描いた「探偵小説	『全集』の第一〇巻の解題「作者の言葉〔「ココニ泉アリ」〕」参照。

定かでないことを表す。

全一八〇回)、川口松太郎作「老春」(「京城日報」昭和一六年二月一四日

年一一月二八日、

全三巻)によると、伊勢良夫は東京芝赤坂新町生まれ

を主に描き、マッカーサーの肖像画の依頼もされたことがある。しかし、 で、太平洋画会と熊岡絵画道場で学んだ。戦後にはアメリカ軍の肖像画 とができない。 「金庫の鍵」も四日の「(中)」と五日の「(下)」の紙面しか見ることが

刻版『京城日報』には欠号が多く、「中」にあたる二四日の紙面は見るこ

伊勢良夫が連載小説の挿絵を描いた新聞には、「読売新聞」と「中外商業 出来ない。

新報」のみで「京城日報」の名前は見えない。※「?」は連載全回数が (九州大学大学院比較社会文化学府博士後期課程三年)